

インド仏教思想を深く読み解き、 「存在とは何か」を探究



人文学部准教授
久間 泰賢

きゅうまいけん
哲学博士
専門分野は、インド哲学・仏教学
1968年生まれ



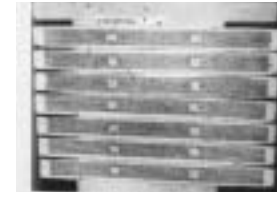
「自己実現」「自分探し」といったキーワードに象徴されるように、自分とは何かを考えることの大切さが見直されている現代社会。哲学という学問にも注目が集まっています。三重大学人文学部では、インド哲学・仏教学に関する独創的な研究を国内外の研究者とともに展開し、その成果を広く発信しています。



ヨーロッパインド学の拠点
ハンブルク大学にて

インド思想は西洋思想にも通ずる

「インド思想」と聞いてどのようなイメージをお持ちになるでしょうか。神秘的な雰囲気の中で、言葉では表現できない超越的真理を求め、ヨーガ行者が瞑想する、といった光景でしょうか。確かに神秘主義はインド思想の重要な要素ですが、それと同時に、言葉を越えた真理に至る前段階として、インドの思想家は緻密な論理を用いて多様な議論を展開します。そうした議論が扱うのは、「存在」とは何か、その「存在」とはどうやって認識されるのか、また言語とは何か、どうやって習得されるのか、などのテーマであり、そこには西洋思想にも通ずるものが多々あります。



サンスクリット写本
(ゲッティンゲン図書館所蔵：写本番号 No.Xc 14/25)



ジュニャーナシュリーミトラの著作を独訳



ローマのアフリカ・オリエント研究所での
研究会の風景



チベット語文献

「諸行無常」と「刹那滅論」

私が研究しているのは、そのようなインド思想の存在論・認識論の側面です。より具体的には、仏教の根本教理「諸行無常(しよぎょうむじょう：あらゆる存在は恒常ではなく、移り変わる)」の発展形態である「刹那滅論(せつなめつろん：瞬間的存在論)」を扱っています。刹那滅論によれば、あらゆる存在は瞬間ごとに生成と消滅を繰り返しています。例えば我々の目の前にある机も、本当は瞬間ごとに消滅しているのですが、次の瞬間に自分とよく似た、ただしわずかに衰えている机を生み出しているために、我々の目にはあたかも机が持続的に存在しつつ、長い時間をかけて古びていくように見えるのです。

ジュニャーナシュリーミトラの著作を独訳

こうした考え方は、現代人にとっては常識外れなものに思われるでしょう。しかしこの刹那滅論が仏教思想全体に与えた影響は大きく、特にインド仏教では存在論・認識論の一基盤をなしています。刹那滅論の枠組みにおいて、「存在する」とはどういうことか、また個々の存在はいかにして認識されるか、これが私の研究の主要なテーマとなっています。研究対象として実際に扱っているのは、10世紀から11世紀にかけて活躍したインド仏教思想の泰斗、ジュニャーナシュリーミトラがサンスクリット語で書いた、刹那滅論に関する著作です。そこでは、刹那滅論において存在・真理というものがどのように定義づけられるのか、という問題が中心に取り上げられています。2005年には、この著作の第一章を校訂・独訳し、ウィーン大学から出版しました。ジュニャーナシュリーミトラは、当時のインド仏教の一大中心地ヴィクラマシーラ寺院で指導的な立場にあり、多くの思想的な著作を残すと同時に、優れた詩文家でもあったと伝えられています。一千年以上も前の圧倒的才能に触れることは、自己の卑小さと否応なしに対峙させられる経験ですが、同時に喜びでもあります。

インド仏教史における密教思想の位置づけ

近年、関心を持っているもう一つのテーマは、インド仏教史において密教思想がどのように位置づけられるのか、という問題です。インドで密教思想が体系化され始めるのは7世紀前後のことですが、密教思想は、それまでの仏教思想(後に「顕教」と総称されるもの)とは明らかに異質な要素を含んでいました。この場合、それは仏の説いた教えなのか、異端ではないのか、という批判が当然予想されます。そうした批判に対して、密教思想の典籍は、自らの思想が仏説であることを立証しようとするのですが、その一方で、密教思想は従来の伝統的な仏教思想よりも優れている、という点も強調されるのです。この論理—仏説でありつつも伝統的教説を凌ぐ—を詳しく解明することで、従来のインド仏教史における密教思想の位置づけを、より立体的に記述し直せるのではないかと、というのが研究の出発点でした。こうした問題意識のもとに、現在、チベット語(サンスクリット原典が散佚し、チベット語の翻訳のみが残る)で書かれたテキストの校訂・英訳作業を進めているところです。このテキストは従来ほとんど研究されていなかったのですが、密教とそれ以外の仏教思想の優劣関係に関する、極めて興味深い視点を含んでいます。私自身は密教思想の専門家ではないため、密教思想を専門とする国内外の研究者との共同作業で、年に何回か研究会を開催しています。この研究成果も、近いうちに公刊したいと考えています。